

「文芸倶楽部」小説総目録 その五（明治37年～38年）

山根賢吉編

第十卷第一号（明治37年1月1日発行）

物名	松原 餓頭	広津 柳浪	1	1
祖	先の 兜	生田 葵山	81	105
喜	録 倉山	松居 松葉	106	136
懸賞小説				
恋	女 房	林 玄川	137	151
電	報	田村 西男	152	163
一	転	大石 観一	164	175
<p>（注）「喜録倉山」の内題作者名は「<small>シエリタン原作</small> 松葉 翻案」とある。 〈雑録〉に、小波の「プロジェクト（伯林新著聞集の「一」）、泉鏡花の「友白髪」、田山花袋の「少女譜」がある。 「懸賞小説」は、一、二、三等。</p>				

第十卷第二号 定期増刊 創刊十周年 ひと昔（明治37年1月15日発行）

性	空 上 人	山田 美妙	1	37
十	年 一 昔	櫻庭 翠村	38	61
兄	の 煩 悶	広津 柳浪	62	109
や	か ず	巖谷 小波	110	137
珍	饌 会	幸田 露伴	138	189
何	？	江見 水蔭	190	246
黒	富 士	遅塚 麗水	247	277
動物	虐待防止会員	北里 竜堂	278	295
生	ける 妻	石橋 思案	296	299

道 迷 ひ 故尾崎紅葉 301-307

(注)「何?」の冒頭に「文学士藤沢古雪君、ユーゴー翁の「エルナニ」を抄訳して、其儘手帳の奥に秘められたるを、おのれ強て一見を迫り、処々写し取りたるを骨子と爲し、例の如く翻案を試みたれど、筆拙きは云ふまでもあらず、彼我の人情異なる多く、時代劇にならば少しく近からむを、当世物にと工風したため、その真に遠からんとする甚し。由て「エルナニ」の原本より九分九厘を捨て、僅かにその一厘のみを拾ひて、別物の如く粧ひ成したり。これ抑も「何」と、心ある人の訝しむを、ほのめかしたる名題、芝居にあらず、茶番なりと笑はれもするべし」とある。「やかず婢」は、内題に「天やかず婢 エルツ作」とあり、「道迷ひ」は登場人物名から見て翻訳と考えられる。「動物虐待防止会員」は脚本である。

第十卷第三号 (明治37年2月1日発行)

雪 の 夜 松原二十三階堂 1-49
生 辨 天 モーパッサン著 50-66
山 小 屋 田山花袋 67-95
畫師実は問者 江見水蔭 96-111

若 き 愁 鈴木秋子 112-139

懸賞小説
島の美人 林玄川 140-154
ほと、ぎす 伊藤紫琴 155-166
小 説 家 河田烏城 167-179
(注)「畫師実は問者」は脚本。「若き愁」は、文末に「トルストイより」とある。「懸賞小説」は「一、二、三等」。「島の美人」の内題の作者名は「玄川小魚」。「時文」に、桂浜月下漁郎の「落合直文先生を哭す」があり、「雑録」に、小波の「手練手袋(伯林新著問集の二)」井上啞々の「浮世小路」がある。

第十卷第四号 (明治37年3月1日発行)

予 備 兵 小栗風葉 1-81
み ち 芝 徳田秋声 82-151
動 員 令 武田桜桃 152-170
出陣の前夜 江見水蔭 171-176
懸賞小説
も つ れ 糸 森露声 177-190
柿 盗 人 野村落椎 190-200

制自 用 車 本 山 荻 舟 201 120

(注)「子備兵」は脚本。「懸賞小説」は「もつれ糸」が二
等、他の二編は三等。〈時文〉に、大町桂月の「日露戦争
の意義」その他があり、〈雑録〉に小波の「金鶏の由来

(伯林新著開集の三)」、天沢著四名モナ・ウアンナ、
〈世態〉に、万菊庵主人「西比利亜の遊廓」がある。

第十卷第五号 (明治37年4月1日発行)

生	か	死	か	広	津	柳	浪	1	1	31
胸	の	焰		口	掬	汗		32	1	68
奈	占	浦	丸	加	藤	眠	柳	69	1	83
貧	し	き	少	女	夏	葉	女	84	1	118
刺	犬			江	上	朝	霞	119	1	135

懸賞小説

青	春	譜	園	都	舞	雨	136	1	149
待	つ	妻	大	石	霧	山	150	1	163
女	こ	ろ	狂	醉	野	人	164	1	176

(注)「貧しき少女」の内題の作者名は「ドストエフスキ
イ」。「懸賞小説」は一、二、三等。〈時文〉に、桂浜月下

漁郎の「韓国に徴す」、〈雑録〉に、小波の「日本軍艦万歳
(伯林新著開集の四)」、在米 永井荷風の「船室夜話」が
ある。

第十卷第六号 定期増刊 花吹雪 (明治37年4月20日発行)

う	し	ろ	姿	小	栗	風	葉	2	1	27	
悲	劇	?	田	山	花	袋		28	1	83	
春	の	月	德	田	秋	声		84	1	113	
観	世	紙	山	岸	荷	葉		114	1	134	
か	は	波	生	田	葵	山		135	1	155	
砂	漠	の	太	田	玉	茗		156	1	185	
決	闘	家	国	木	田	独	歩	186	1	242	
結	の	ゆ	く	へ	竹	貫	佳	水	243	1	271
恋	の	ゆ	く	へ	竹	貫	佳	水	272	1	289
残	潮	武	田	桜	桃			290	1	317	

(注)「砂漠の恋」の内題の作者名は「モーパッサン作」と
ある。「決闘家」は翻訳(原作者はロシアヤラチコフア
ウディ)。

第十卷第七号 (明治37年5月1日発行)

犬博士	山田美妙	1	39
紅宝石	泉斜江	40	83
捕虜の逃走	トルストイ著 高階柳蔭訳	84	136

雲のみだれ	橋本紫星	160	172
(注)「懸賞」は、一、二、三等。(雑録)に、小波「恋の呪咀(独逸奇聞の二)」、柴田流星訳「夢中解剖」がある。			

懸賞戦争小説

第十卷第九号(明治37年7月1日発行)

非々国民	本山袖頭巾	127	136
戦死の花	河田烏城	137	149
勇士の妹	田村西男	150	163

毘	江見水蔭	1	72
律	義者	73	117
狐手套草	西村醉夢	118	149

(注)「紅寶石」は、内題に「ルビイ」のルビがある。「懸賞戦争小説」は、一、二、三等。(雑録)に、小波の「死

兄の偵察
 まぼろし | 151 | 163 |

人の手(伯林奇聞の二)」、荷風の「舍路港の一夜」、夏ルゲエネフ作の「手向の花」、思案の「嗚呼正太夫君」がある。

義姉妹
 小寺秋雨 | 164 | 171 |

第十卷第八号(明治37年6月1日発行)

鴟	緑江	1	20
ぬれ	師北村馬骨	21	65
春の怨	堀内新泉	66	101
消極	藤本夕鷗	102	134

村の名物	鈴木好狼	172	185
文士の戦争観			
戦争と文芸	坪内逍遙	189	193
外交と囲碁	幸田露伴	193	197
戦勝後の文学	姉崎正治	198	199

懸賞戦争小説

湖畔の家	野村董雨	135	146
決死水兵	大石霧山	147	159

(注)「狐手套草」は、内題に「チキタリス」とルビがある。「懸賞」は例によって一、二、三等。この号から「文士の戦争観」が掲載される。(雑録)に窪村の「竹の屋の

湖畔の家	野村董雨	135	146
決死水兵	大石霧山	147	159

士士の戦争観」が掲載される。(雑録)に窪村の「竹の屋の

田うこぎばなし」、小波の「生霊死霊(独乙奇聞の三)」がある。

第十卷第十号 定期増刊 勝いくさ(明治37年7月15日発行)

火雨洞	櫻庭窠村	1	1	29
都の夢	広津柳浪	30	1	97
国外軍事通信員	泉鏡花	98	1	109
浮かぬ魂	平尾不孤	110	1	155
田舎の牧師	加藤眠柳	156	1	185
無宗教者	小川煙村	186	1	227
里の女	瀬沼夏葉	228	1	250
女郎	如谷活東	251	1	276
勝利唄	武田桜桃	277	1	297
万歳	石橋思案	298	1	314

(注)「火雨洞」は、内題では、「ひさめのほら」とルビを付し、「田舎の牧師」は、内題では「田舎牧師」、「里の女」の内題の作者名は「チエホフ作(夏葉女史訳)」とある。

第十卷第十一号(明治37年8月1日発行)

大伴家小杉天外	1	1	99
---------	---	---	----

落日愁	斎藤溪舟	100	1	125
今様那耶	幸堂得知	126	1	147

懸賞戦争小説

いのち毛	海賀変哲	149	1	161
未亡人	田村西男	162	1	173
首途	児島晴浜	174	1	182

文士の戦争観

戦争と演劇及び稗史	依田学海	189	1	193
社会主義と際物文学	広津柳浪	193	1	197
時局談	某博士	197	1	209

(注)「懸賞」は一、二、三等。《雑録》に、玉茗の「赤城紀行」、小波の「盗難の判断(独乙奇聞の四)」、天溪の「露宮廷の暗殺」、佳水の「支那街(桑港土産の六)」がある。

第十卷第十二号(明治37年9月1日発行)

柳小鳴	泉鏡花	1	1	47
刺客	中山白峯	48	1	81
中心二枚絵草紙	果林子原作	82	1	120
懸賞戦争小説	霞亭脚本			

別れの風 小林友 121-133

薄命記 織笠白梅 131-144

灯台の火 三阪水鈔 145-152

文士の戦争観

満州丸所見 塚原波柿 157-166

好戦論者と不好戦論者 上田文学士 166-172

文士の両面態度 江見水蔭 172-174

従軍実話 寺崎広業 175-184

(注)「懸賞」は、一、二、三等。(雑録)に、小波の「妄執の鬼火(独逸奇聞の五)」が、《世態》に、椋蓮花の「露国婦人の半面」が、《演劇》に、松居松葉の「嘘市川左团次」がある。

第十卷第十三号(明治37年10月1日発行)

暗翠 塚原波柿 1-33

美人俠 空々閑人 34-58

本脚 深沙大王 泉鏡花 59-112

懸賞戦争小説

露 大石霧山 113-123

新島守 二牛迂人 124-136

文士の戦争観

戦後文学者の方針 高田早苗 139-143

従軍懐旧談 遅塚麗水 143-148

ケル子ルの生涯 登張竹風 149-161

(注)「美人俠」の内題には「戦地美人俠 在〇〇艦 空々閑人」とある。「懸賞」は、一、二、三等。(雑録)に、美妙の「紅葉子追憶の記」、小波の「山の神(独逸奇聞の六)」、天溪の「魯園作梨子エホーフ氏遊く」があり、《演劇》に、上田柳村の「バオロ・フランチェスカ恋物語」がある。

第十卷第十四号 定期増刊 軍談大鑑(明治37年10月15日発行)

講談特集号で、題名と作者名のみを記す。

摩天嶺の十勇士 猫遊軒伯知

姉川の激戦 邑井一

味方ヶ原の偵察 神田伯山

旗艦三笠の奮闘 神田伯竜

関ヶ原七本槍 宝井馬琴

三位 宇治の血戦 松林東玉

伊達阿武隈川の勇戦 放牛舎桃林

仁川の千代田艦

伊藤痴遊 145

鬼上官清正

桃川如燕 158

南山の聯隊旗

伊東陵潮 161

吉野落

柴田南玉 167

本下佐屋川の一番乗

一立斎文車 179

小 山 評 定

清草舎英昌 179

大坂中 復原兵曹の奮戦

昇龍斎貞丈 179

勇 婦 巴 御 前

一竜斎貞山 179

豪胆の兵士

真竜斎貞水 179

真田の入城

神田松鯉 179

(注)「小山評定」の内題には「関ヶ原」の角書があり、「真田の入城」の内題の作者名は「伯山改め神田松鯉」とある。

第十卷第十六号(明治37年12月1日発行)

大黒屋福松 宮崎三昧 1

ほぐれ緑 斎藤紫軒 40

かた、がへ 鈴木秋子 115

新 思 想 武田桜桃 148

懸賞戦争小説 149

幕上の涙 大石霧山 181

門 出 森田あきみ 183

葛 紅 葉 小川兎馬子 196

文士の戦争観 207

戦争と俳句 内藤鳴雪 219

第十卷第十五号(明治37年11月1日発行)

三 鱗 響庭篁村 1

恋の火花 生田葵山人 32

豚 林 モーパッサン著 79

刺 鷲 亭 長田秋濤訳 95

懸賞戦争小説 思案外史者補作 96

赤 十 字 山田萍南 132

133

144

戦争と俳句

内藤鳴雪

223

228

戦争と批評家及其態度 松居 松葉 228 ~ 232
 従軍 視 戦 談 新田 静湾 232 ~ 237
 (注)「懸賞」は、一、二、三等。(「雜録」に、小波の「時
 日の迷信(独逸奇聞の八)」、佳水の「悪魔の姿(桑港土産
 の十)」がある。

第十一卷第一号(明治38年1月1日発行)

綾 小 袖 川上 眉山 1 ~ 42
 座 敷 半 広津 柳浪 43 ~ 127
 果 報 者 齋庭 蕉村 128 ~ 176

懸賞小説

新 知 己 斎藤 紫軒 177 ~ 191
 宿 の 春 山田 萍南 192 ~ 205
 画 題「統一」 安倍 村羊 206 ~ 219

(注)「懸賞」は一、二、三等。(「名家談」に、蕉村、三昧、
 柳浪の「作家の苦心」があり、(「雜録」に、露伴迂人の
 「驚狩」、小波の「宝船三番般」、花袋生の「さびしみの悲
 哀」、天溪の「竜尾蛇頭」がある。

第十一卷第二号 定期増刊 初芝居(明治38年1月15日発行)

脚本ばかりであるが、外題、作者名、ページをすべて記す
 ことにする。

胡 蝶 の 舞 江見 水蔭 1 ~ 74
 胡 蝶 三人相 統男 川上 眉山 75 ~ 116
 エル ナ ニ ユーゴー 松居 松葉 117 ~ 183
 叔 乎 姪 乎 シルレル 橋本 青雨 184 ~ 230
 花 橘 空々 閑人 231 ~ 244
 梅雨 闇夜一夜 嬌娥 岡 鬼 太郎 245 ~ 256

(注)「エルナニ」は、内題に「初芝居」の角書があり、
 作者名は、「日国ウィトル・ユーゴー先生作劇」とあり、

Don Sancho 犬田小文吾 (是より以下はたゞ役の出場をのみ村
 照せしもの、身分を比較せしに非ず)

Don Ricardo 犬塚 信乃

Don Matias 犬飼 現八 (以下略)

と、八大子に擬している。「叔乎姪乎」も翻案であるが、
 この作の最後に「これは素と仏人ヒカアルの作で、独のシ
 ルレルが訳したので有名なのですが、訳の方が却て原作に
 優る数等との評があるので、妄ではシルレル作として、重
 訳を試みたのです。紙数の都合等で大分省略をしたところ
 が有ります 訳者」とある。(「雜録」に思案の「素人芝

居懷旧談、左川の「泰劇界逸話」、鶯塘の「素人見物」、岡村柿紅の「俳優の声」などがある。

第十一卷第三号 (明治38年2月1日発行)

新夫婦	小栗風葉	1	48
勢至丸	山田美妙	49	98
ピヤニスト	泉斜汀	99	138
懸賞小説			
片頬の笑	森田あきみ	139	150
紅雪	大越台麗	151	164
祝捷の宴	柏木喬月	165	177

(注)「懸賞」は、一、二、三等。〈時文〉に桂月の「日本人と旅順口」、〈名家談〉に、井上門了の「日本女子の迷信」、坪井正五郎の「日本の女」、登張竹風の「女性観」、〈活社会〉に、ながしの「戦時の吉原」、銀座街史の「電車の十時間」、〈演芸界〉に、小波の「伯林の素人芝居」、〈新家庭〉に、「花柳界の化粧法」、〈風俗〉に、無名監の「横須賀の花柳界」などがある。

第十一卷第四号 (明治38年3月1日発行)

家の魔	巖谷小波	1	22
ひとりずみ	生田葵山	23	102
泣ぼくろ	山岸荷葉	103	152
懸賞小説			
朝露	児嶋晴浜	153	163
春告鳥	三阪水鏝	164	176
防寒具	伊藤鏡雨	177	187
外形見の写真	長谷流月	188	196

(注)「懸賞」は、一、二、三等と選外。〈名家談〉に、露伴の「仏教に現れたる女性」、竹風の「女性観」、鳴雪の「女の能力」、〈活社会〉に満州浪人の「満州の紅裙隊」、山田金月の「小待合」がある。

第十一卷第五号 (明治38年4月1日発行)

銀短冊	泉鏡花	1	64
母の罪	岩田烏山	65	123
村の大事件	ホウソーン作 西村渚山訳	124	141
懸賞小説			
おもかげ	中村稻海	142	157

臘 月 夜 森田あきみ 158-169

こ ぼ れ 梅 小川兎馬子 170-181

(注)「懸賞」は、一、二、三等。「おもかげ」の内題は「佛」。ゴキウ。《名家談》に、依田学海の「稗史に現れたる女性」、久保天随の「婦人観」、伊井谷峰の「女形と女優」、

《新家庭》に、「花柳界の化粧法」、《雜録》に、花袋の

「淀川づたひ」、《時文》に、桂月の「恋愛と結婚」などが

ある。

第十一卷第六号 定期増刊 明治俳句 風流陣 (明治38年4月

15日発行)

俳句特集号で、大略のみ記す。

先ず、

巖谷小波 伊藤松宇 内藤鳴雪

岡野知十 角田竹冷 其角堂機一

春秋庵幹雄 雪中庵雀志

の八名の選者を記し、

入選俳句

一点-十五点

入賞俳句

十六点-卅一点

を掲載。各頁の上段(龜頭)には、文芸倶楽部編輯局新選「明治歳時記」、蓮二房「俳諧古今抄」、櫻野愚風著「樵風文粹」が掲載されている。東都浪水選

第十一卷第七号 (明治38年5月1日発行)

宮 ぐ づ れ 塚原 蓼 洲 1-74

水 中 花 中山 白 峰 75-134

御 飯 時 北里 龍 堂 135-148

懸賞小説

犯 さ ぬ 罪 大高 綾 子 149-162

夜 梅 大越 台 麓 163-176

禁 煙 関口 英 哀 177-188

(注)「懸賞」は、一、二、三等。《雜録》に、河合とし子「恋する人へ」があり、その冒頭に「次に訳せるはエウアレット、マクテルという通人の恋する若き男女への教戒なり。欧米社交界の端を知る料にもとて。」とある。

第十一卷第八号 (明治38年6月1日発行)

漆 標 川上 眉 山 1-54

名張少女	田山花袋	55	111
岡の上	永井荷風	112	132
しかばね	小林蹴月	133	146
懸賞小説			

姉ささん	瀬戸新声	147	161
雪物語	児島晴浜	162	174
鐘の音	音平繁丸	175	184

(注)「懸賞」は、一、二、三等。《名家談》に、竹の屋主人の「近松作中の婦人」、雪中庵雀志「花柳茶話」、《雑録》に、久保天隨の「李立翁の女性美論」、しゅんらうの「精幽霊的結婚」、《活社会》に、艶魔王の「伯林照魔鏡」、悪坊主の「外人の日本女性観」、《時文》に、思案の「嗚呼！野口寧齋君」がある。

第十一卷第九号(明治38年7月1日発行)

画眉楼	遅塚麗水	1	42
恨の焰	海賀彦哲	43	85
新二人静	竹柴晋吉	86	98
懸賞小説			
行春の曲	山東脈花	99	110

明衣ヶ浦	児島晴浜	111	125
(注)「懸賞」は、一、二、三等。《名家談》に、竜峡の「家庭の婦人」、学海の「噫岸田吟香翁」、《雑録》に、加藤眠柳の「妻や子」、桜桃の「故左川君を憶ふ」、《活社会》に、玉井菊堂の「妾奉公」などがある。			
花柳界の迷信	三味道人	126	139

第十一卷第十号 定期増刊 花柳風俗誌(明治38年7月15日発行)

題名と筆者名のみを示す。	三味道人
日本遊所沿革史	九樓人
花柳地的関係	粹通子
東京花柳界取締規則の沿革	紅緑子
遊窟裏面探検	色海迷士
半玉	与屈亭
箱屋	裏町倉樹
東京現在の花柳界起源	風流若翁
吉原の新造	粹絶子
花柳界の迷信	三八醉痴

料理店の今昔 板前子
 花柳界の敵 蛇道子
 五宿と府中 あかざ生
 恋の品川 磯野小浪
 横浜の花柳界 澤山人
 静岡の花柳界 不二行者
 岡崎の花柳界 京龍庵春齋
 名古屋の狭斜 盛庵
 京都の遊廓 白鳳子
 美保関の花柳界 孤舟
 浪華の花柳界 黒法師
 岡山遊廓 薫山人
 玉鳴の花柳界 紅涙生
 広島の花柳界 能美坊
 江戸子の長崎風俗 鶴港老人
 潮来の名廓 村雨生
 廓行脚 艶叟

(注)「花柳地的関係」の内題は、「花柳界の地的関係」とあり、「東京花柳界」の内題は「東京花柳界」が角書になり、「潮来の名廓」の内題は、「潮来の古名廓」とあり、

「廓行脚」の内題では、「さとあんぎや」とルビを付し、(平潟、湯本、仙台、若松、東山、飯坂)とある。

第十一卷第十一号 (明治38年8月1日発行)

紐鏡 柳川春葉 1 | 59
 一週 千葉紫草 60 | 128
 明暗 山田旭南 129 | 145
 懸賞小説

握手 黒河内桂林 147 | 159
 磯松風 伊藤鏡雨 160 | 173
 千寿庵 大高綾子 174 | 190
 (注)「懸賞」は例の如く、一、二、三等。《新家庭》に「夏の身嗜」、《名家談》に麗水の「美人観」、《活社会》に醉容散士の「紡績工女」がある。

第十一卷第十二号 (明治38年9月1日発行)

武玉川 嬰庭篁村 1 | 55
 先夫 鈴木秋子 56 | 97
 劇首 女夫 結勝 勝間舟人 98 | 130
 懸賞小説

銃 音 内山捻華 131-145

発行

派 手 浴 衣 志村白汀 146-161

題名と作者名(語り手と言うべきか)のみを示す。

(注)「懸賞」は一、二等。《雑録》に、春浪の「水裡鮑

おせつ徳三郎 橘屋円喬

話」、《活社会》に、山田金月の「心中実話」がある。

桜 風 呂 三遊亭円遊

愛 と 恋 小栗風葉 1-71

駱 駝 柳家小さん

東方物語 レルモントフ作 72-83

(三人兄弟 三遊亭円馬

あだなさけ 武田桜桃 84-132

火事息子 三遊亭円右

懸賞小説

今戸の狐 柳亭燕枝

秋 雲 冬 雲 早川北汀 133-147

樟 脳 玉 三遊亭円左

不断煩惱 山東脈花 148-161

浮世根間 桂文左衛門

白 菊 大越台麓 162-175

煙草好き 快樂亭ブラック

(注)「懸賞」は一、二、三等。《時文》に桂月の「露国の

神道茶碗 春風亭柳枝

屈辱」「血の都」「日露講和の不平」があり、《名家談》に

士族の商法 三遊亭遊三

三輪田文学士の「女子と文芸」、坪谷水哉の「北海道みや

朝 友 三遊亭円橘

げ」があり、《雑録》に花袋の「北国めぐり」、兎耳生の

村 正 曾呂利新左衛門

「美人の顔」、泉斜汀の「紅葉先生の幼時」がある。

二 十 四 孝 蝶花樓馬楽

側 祭 三遊亭小円朝

清 正 公 酒 屋 柱 文 治

思 違 三遊亭円流

第十一卷第十四号 定期増刊 落語大全 (明治38年10月15日

宿屋の仇討 柳家小三治

(注)《雑録》に、鬼太郎「色物語」、二洲橋生「快樂亭ブ
ラック」がある。

第十一巻第十五号(明治38年11月1日発行)

破	壊	主	義	山	田	美	妙	1	40
濁	ら	ぬ	水	徳	田	秋	声	41	102
愛	の	声	堀	内	新	泉		103	138

懸賞小説

血	蕎	薇	井	手	蕉	雨	139	153
白	雨	録	井	上	梨	花	154	169
辰	己	気	質	英	蟬	花	170	182

(注)「懸賞」は一、二、三等。「血蕎薇」の内題に「けつ
さうび」とルビを付す。《活社会》に近藤蕉雨の「西の市」、
《雑録》に荷葉の「ひねり文」がある。なお、「懸賞小説
の飛躍」として、「募集規定」を「来年一月より紙数を五
十枚に拡張し、賞金を増加し第一等に金三十円、第二等に
金二十円」と改める旨を記している。従来の規定は「二十
枚」で、一等二十円、二等十五円、三等十円であった。こ
れを来年より「三十枚以上五十枚以下」とし、「三十枚以

下の原稿は没書す」とある。三等の賞金は十円のまま据え
置かれたものと思われる。

第十一巻第十六号(明治38年12月1日発行)

懸	賞	小説	懸	賞	小説	懸	賞	小説	懸	賞	小説					
悪	戯	篇	泉	鏡	花	1	77	青	い	花	西	村	醉	夢	98	142
山	の	女	岩	田	鳥	山	78	池	の	主	橋	本	翠	泉	159	172
病	院	船	瑞	岡	露	泉	173	転	地	黒	河	内	桂	林	143	158

(注)「懸賞」は一、二、三等。《雑録》に玉茗沢の「初恋
日記」、荷風の「市俄古の二日(日記の中より)」がある。

本目録の作成にあたっては、架蔵誌のほか、日本近代文学
館・国立国会図書館所蔵誌によった。